

日本英語学会第40回大会発表要旨

<研究発表>

Zoom 第1室 (11月5日午後)

司会 坂本祐太 (明治大学)

英語を母語として獲得する幼児の Subject-in-situ generalization と統語構造

團迫雅彦 (北九州市立大学)

本発表は、vP 内に構造格を持つ主語および目的語が生起することが許されないことを規定した Subject-in-situ generalization (以下、SSG) (Alexiadou and Anagnostopoulou (2001[1])など) を幼児の言語獲得の観点から検証することを目的とする。SSG は言語一般に適用される制約であるため、言語獲得過程の幼児も同様にこの制約に従わなければならないはずである。ところが、予測とは異なり、時制辞や一致形態素が脱落した vP を構成していると考えられる他動詞文において、非主格主語と目的語が同時に実現する例 (*Her have a big mouth.* (Nina, 2;2,6)) が観察された。この例は SSG 違反に見えるが、(i) 平叙文に限り観察されること及び (ii) 非主格主語は時を表す副詞や否定辞英語に先行して現れることから、非主格主語は vP に留まらず TP 指定部に移動していると考えられ、これにより vP 内には目的語のみが生起することになり、SSG 違反にはならないと説明できる。本発表は SSG を言語獲得の観点から検証を行い、SSG は幼児文法にも作用していることを明らかにする。

[1] Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (2001) "The Subject-in-Situ Generalization, and the Role of Case in Driving Computations," *LI* 32, 193–231.

不完全コピー形成

大宗純 (関西外国語大学)

本発表では、Chomsky (2021[1]) の極小主義の枠組みの下、(i) FormCopy (コピー形成) は2つの要素に不完全なコピー関係を構築できると提案する。さらに、(ii) その提案とそれによる分析・帰結は真の説明理論 (cf. [1]) へ接近するものであると主張する。

[1]の枠組みでは言語特有の条件が適用されない場合は外部併合よりも内部併合が優先される。しかし、この内部併合優先適用に厳格に従うと、多くの言語表現 (e.g. *there* 構文等) の派生が困難になるという経験的問題が生じる。この問題を解決するために、本発表では (i) の不完全コピー形成を提案する。また、この提案は余分な (外部) 併合の適用を避けるという意味でより厳格に極小主義のテーゼ (SMT) に従っているだけでなく、その実質的帰結の SMT の有効化機能 (Enabling Function of SMT) を示す。この意味において、本提案とそれを用いた分析は、真の説明へより接近していると言える。

[1] "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160: 1–41.

司会 坂本祐太 (明治大学)

数量詞遊離現象における日本語と英語の(非)対称性

川満潤 (九州大学大学院)

英語における数量詞遊離現象では、動詞の補部位置に数量詞が残留できないことが広く観察されている(Bošković (2004[1])他)。他方、日本語では、動詞の補部位置で数量詞遊離が生じても適格文と判断される。

(1) *Mary hates the students all.

(Bošković (2004: 682))

(2) リンゴを学生がこっそり 2 個食べた。

本発表では、移動・残留分析の立場から、英語と日本語における数量詞遊離の文法性の差異を、Chomsky (2013[2], 2015[3])で提案されたラベル付けアルゴリズム分析の枠組みに基づき、捉えることを目標とする。具体的に、主要部-主要部構造(H-H 構造)は、集合のラベル付けに失敗するという仮定の下、英語における数量詞遊離は、当該の構造を生じさせ、ラベルが適切に決定しないことを主張する。一方、日本語では、Watanabe (2008[4])が示唆しているように、数量詞を伴う構造の豊かさを仮定することで、H-H 構造によるラベル付けの失敗が生じないことを主張する。

[1] “Be Careful Where You Float Your Quantifiers.”

[2] “Problems of Projection.” [3] “Problems of Projection: Extensions.” [4] “The Structure of DP.”

Pro-form 「の」と NP 削除

磯野翌加 (九州産業大学)

Maeda and Takahashi (M&T 2016[1]) は、長崎方言のように代名詞 (pro-form) の「と」が生じるデータを用いて、NP 削除分析 (Saito and Murasugi 1990[2]) を擁護している。一方 Hiraiwa (2016[3]) は、pro-form を含めた軽名詞分析を提案し、日本語には NP 削除はないと主張している。

本発表では、M&T が提供する NP 削除のデータでは削除が含まれているかどうか分からないことを示す。M&T のデータ (“most” と “one” のいずれも広い作用域を取るという曖昧なもの) について、do so 照応もこの並列性を示すので、逆スコープ解釈では削除が関与するかどうか不明である。そして、「と (標準語の「の」)」が従来の pro-form である考えを保持した Hiraiwa (2016) の分析は、より多くのデ

ータを捉えることができ、妥当であることを示す。

[1] “NP-Ellipsis in the Nagasaki Dialect of Japanese” [2] “N’-Deletion in Japanese” [3] “NP-Ellipsis: A Comparative Syntax of Japanese and Okinawan”

Zoom 第 2 室 (11 月 5 日午後)

司会 大谷直輝 (東京外国語大学)

「経験者」を伴う there 構文に関する構文文法理論的考察

南佑亮 (神戸大学)

いわゆる存在を表す there 構文には、*comfort*, *consolation*, *solace* などの心理名詞が動詞後の名詞句 (Post-Verbal NP, 以下 PVNP) を占めるタイプのもの (=心理 there 構文) がある。心理 there 構文には、より典型的な there 構文には見られない特徴がある。第一に、(1)のように、PVNP が表す心理状態の経験者が for 句で明示されることがある。第二に、経験者を主語とする他動詞文 [= (2)] とパラダイム対立 (Lambrecht (2000[1])) の関係にある。

(1) For me/her, there was comfort in that thought.

(2) She took/found comfort in that thought.

本発表では、構文文法理論に立脚し、とりわけ抽象度の高い構文知識の役割も重視する立場 (Hayase (2018[2])) から、上記のような心理 there 構文の特徴は、より抽象度の高い there 構文の意味と心理名詞の意味の間のミスマッチに起因すると分析する。さらに、この分析を支持する証拠として、心理 there 構文が他動詞文に対し、頻度の点で有標の地位にあることを示す。

[1] “When Subjects Behave Like Objects,” *Studies in Language* 24, 611-682. [2] “Reconsidering the Status of Constructional Schema,” 『認知言語学研究』 Vol. 3, 72-81.

Or 条件命令文に関する構文文法的分析—発話行為の形成に着目して—

田村心 (筑波大学大学院)

Or 条件命令文 (*Or Conditional Imperative*; 以下、OCI) は、主に「命令文 *or* 平叙文」という形式を取り、命令文では話し手による「行為要求」を、平叙文では「その要求に従わなければ起りうる聞き手にとって望ましくない出来事 (すなわち、聞き手に従わせる理由)」を伝達する (例: *Be careful or you'll lose your bag.*) (Takahashi (2012[1])).

本発表は Takahashi (2012)の分析に基づき、「他の構文との関連付け」の観点から OCI の振る舞いに対して説明を与える。Takahashi (2012)は構文文法の観点から、OCIはその上位構文である非対称 *or* 構文 (*X or Y*) に命令文 (*X*) と平叙文 (*Y*) が生起した融合構文 (*Amalgam construction*) であると分析する。本発表では、OCIの上位構文である非対称 *or* 構文は、Kanetani (2019[2])が提案する推論構文 (例: *It has rained, because the ground is wet.*) と「発話行為の単位の形成」という点で類似した振る舞いを示すことに着目し、OCIを含めた非対称 *or* 構文は推論構文と関連付けられることを主張する。

[1] *A Cognitive Linguistic Analysis of the English Imperative: With Special Reference to Japanese Imperatives.* [2] *Causation and Reasoning Constructions.*

司会 田川拓海 (筑波大学)

使役動詞補文に出現する原形不定詞の非同時性について

村岡宗一郎 (日本大学)

使役動詞の原形不定詞は当該事象の完結性に加えて主節動詞との同時性を表す。その為、(1)のように時間差を表すことができないが (cf. 中右(1980: 139)[1])、(2)の例を容認する先行研究も存在する。

- (1) *Last night she {*made* / *let*} him go tomorrow. (Mittwoch 1990: 11[2])
- (2) a. Her early trauma *made* Mary seek therapy later in life. (Safir 1993: 59 [3])
- b. We can't now *let* Gazza *play* for England in the future. (Felser 1999: 54[4])

久保田(2013: 84)[5]によれば、原形不定詞は実際には時間差があっても概念上は働きかけをしたと同時に補文の内容が実現したことを表すという。本発表では、中右(1980)の述べる同時性は、(2)の用例を説明できるのか、また久保田(2013)の述べる概念的同時性はどのレベルまで適用できるのかについて分析を行う。そして、本研究の主張として、(2a)の原形不定詞は同時性を表す一方で、(2b)の非同時性を表す例は主節主語がその使役事象を自在にコントロールできる場合に限られることを実証する。

[1] 「テンス・アスペクトの比較」 [2] “On the Distribution of Bare Infinitive Complements in English.” [3] “Perception, Selection and Structural Economy.” [4] *Verbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Constructions.* [5] 『英語学点描』

動詞 cost を用いた二重目的語表現の意味

辻早代加(和歌山県立医科大学)

典型的な二重目的語構文は、I gave him money. にみられるように、「間接目的語で表される人に、直接目的語で表されるものを受け取らせる」という状況を表している(Goldberg 1995[1]など)。ところが、The book cost him 10 dollars.や The accident cost him his life.においてはその解釈が成り立たず、むしろ「間接目的語で表される人に、直接目的語で表されるものを失わせる」という、構文の典型的な意味とは反対の意味を示すようである。さらに調査を進めると、「失わせる」とも解釈できない例が多数みつき、cost 二重目的語表現は、先行研究で想定されているよりも多くの意味を表せることがわかる。本発表では、‘NP_X cost NP_Y NP_Z’が表し得る意味を、商取引フレームの考えから説明し、例外に思われる cost 二重目的語表現が、他の二重目的語表現と共通性をもつことを指摘する。

[1]Goldberg. 1995. *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. U of Chicago P.

Zoom 第3室 (11月5日午後)

司会 町田章 (広島大学)

強制分析から見た名詞由来動詞の特徴

岡田祐輝 (筑波大学大学院)

本発表は、英語における名詞由来転換動詞(転換動詞、例: summer_v)の考察を通して、明示的な接辞付加による派生動詞(例: summerize_v)と比べ、意味的な多様性を示すのはなぜか、同じような意味において共存しうるのは、

という問いに答える。具体的には、転換動詞が見せる意味的柔軟性と統語フレームとの密接な関係性から、構文による強制分析が有効であることを論証する。しかし、Lauwers (2014[1])などが指摘するように、強制が範疇を超えた変化に対してどのように関わるのか、どのような場合に上書き強制(範疇変化を伴う強制(Audring and Booij (2016[2])))が可能になるのかは明らかになっていない。この問題に対して、本発表では、名詞語彙項目を強制し解釈を豊かにする構文は、通常の項構造構文からは逸脱した一種の破格構文であると主張する。更に、その有標性ゆえ、通常の項構造構文には見られない特殊な語用論的含意を伴わなければならないことについても議論する。

[1] “Between Adjective and Noun: Category/Function, Mismatch, Constructional Overrides and Coercion” [2] “Cooperation and Coercion”

ジェネラルエクステンダー or whatever の語用論的意味と意味論的特性の関わり

松山加奈子 (奈良女子大学大学院)

ジェネラルエクステンダーとは、主に文末で使用される or something や and everything などの口語的な表現を指し、or whatever もその一つに含まれる。(1) It’s the same in any situation: in a prison, hospital or whatever. 本発表では、(1)のような or whatever の働きを、1 カテゴリー形成 2 ヘッジ 3 トピック閉鎖 4 無関心な態度、に分類し、類似表現とされる or something と比較して、or whatever の語用論的意味を、より精緻に特徴づける。そして、語用論標識 whatever との関わりにおいてのみ考察されてきた同表現を、構成要素の意味論的特性にまで掘り下げて論じる。具体的に or は

「代替性」(Ariel and Mauri 2019 [1])、whatever は any と同じ「不定のフリーチョイス性」(Horn2000 [2])であるという先行研究を手掛かりに、ジェネラルエクステンダー or whatever の語用論的意味と意味論的特性の関りを明らかにする。

[1] “An ‘Alternative’ Core for or,” *Journal of Pragmatics* 149 [2] “Any and (-) ever: Free Choice and Free Relatives,” *The proceedings of the Fifteenth Annual Conference of the Israel Association for Theoretical Linguistics*

司会 平沢慎也 (慶應義塾大学)

連結動詞 *remain* を伴って生じる「未完了」を表す 2 つの主格補語構文

岩宮努 (大阪大学大学院)

その状態にもはや変化は生じないと想定される「完結」を表す分詞形容詞 (*V-ed*)は *remain* の補語として容認されないが、*to* 不定詞に組み込む、または否定辞 *un-*を付加することによって、この意味制約をうけず表現として成立する (1)。

- (1) ...this hypothesis **remains {to be proven/ ≠ unproven/ *proven}**...

(AU 2016/ NOW [1])

- (2) The construction workers that were at the scene **remained {unharmed/ *to be harmed/ *harmed}**...

(US 2020/NOW)

ただ、不定詞を用いた表現の場合、目的達成の意思をもつ第三者の存在が示唆されるため、人を主語にとる表現も、*V-ed* 同様にみとめられない (2)。本稿は、この 2 つの主格補語構文の意味と形式を、[NP₁ *remains* {*un-V-ed*/

to be V-ed}] ↔ [the (intentional) action to X₁ has not been completed {by being *V-ed* / by being *V-ed*, by a (potential) agent}] (NP=PATIENT) と表し、成立頻度や汎用性の観点から、後者は前者のサブパートを構成することを示す (坪井・早瀬 2019 [2])。

[1] Now Corpus. BYU. (<https://corpus.byu.edu/now/>) [2] 坪井栄治郎・早瀬尚子. 2019. 『認知文法と構文文法』東京：開拓社。

日本語における英語由来の外来語の動名詞について

長谷部郁子 (筑波大学)

神谷昇 (筑波大学)

日本語では、「ハンバーグをライスにオンする」のように、位置関係などを表す英語の前置詞や不変化詞由来の外来語の動名詞 (VN) が「する」と共に生産的に用いられる。本発表では、これらの VN 用法は、前置詞や不変化詞の LCS が使役事象 (影山 1996) における下位事象[y BECOME [y BE []]]内の BE の補部のスロットに補充 (影山 2002) されることにより形成されると提案し、結果状態や着点を含意しない不変化詞由来の外来語は、この下位事象と相容れない LCS を持つので上記の VN 用法が許容されないと論じる。また、この VN 用法の自他交替には LCS の「使役化」(影山 1996) の操作が関わると主張し、これらの VN が同じ下位事象を共有して「使役化」するのは、日本語には有界性パラメーター (Kageyama 2001) に[0 bounded]の値が与えられているからであると結論する。

Zoom 第 4 室 (11 月 5 日午後)

司会 茨木正志郎 (関西学院大学)

二重目的語構文の受動文の歴史的発達

飯田昇汰 (名古屋大学大学院)

英語史を通じて、二重目的語構文の受動文には、主題項を主語とする主題受動文、主題項を主語とするが、与格形態を持つ受益者項が見かけ上主語位置にある与格前置受動文 (Him was given a letter_{NOM}.), 受益者項を主語とする受益者受動文の 3 種類が存在する。Allen (1995[1])によると、主題受動文は古英語から観察されるが、16 世紀までに衰退した。

これが正しいければ、近代英語においては主題受動文が受益者受動文に比べ頻度が低いことが予測される。本発表では、歴史コーパスを用いて当該受動文の頻度推移を調査し、結果として Allen の観察とは異なり、主題受動文は近代英語を通してある程度の頻度で観察されることを示す。そして、英語史における二重目的語構文とその受動文に対して極小主義の枠組みに基づく統語的分析を与えるとともに、その歴史的発達を格体系と V2 現象の変化に関連づけて説明する。

[1] Allen, Cynthia L. (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Oxford University Press, Oxford.

動詞 Begin の繰り上げ動詞用法への通時的変化について

笠井俊宏 (名古屋大学大学院)

Perlmutter (1970[1])は、動詞 begin がコントロール動詞と繰り上げ動詞の両用法を持つと主張している。本発表の目的は、電子コーパ

スを用いた調査より、動詞 begin が繰り上げ動詞へと変化する過程を明らかにすることである。

本発表では、電子コーパスから得られたデータより、古英語における動詞 begin はコントロール動詞としての用法しか持たず、繰り上げ動詞としての用法は後期中英語になって初めて観察されると主張する。また、Tanaka (2007[2])における不定詞標識 to の形式素性の変化、およびそれに伴う to 不定詞節の構造変化を援用することで、後期中英語に統語条件が整ったことにより繰り上げ動詞としての用法が可能になったと提案する。したがって、動詞 begin は to 不定詞節の構造変化という統語的要因により繰り上げ動詞としての用法が出現したと主張する。

[1] “The Two Verbs *Begin*,” *Readings in English Transformational Grammar*. [2] “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *The Journal of Comparative Germanic Linguistics*.

司会 杉村美奈 (立命館大学)

項構造に対する音韻論的アプローチ：名詞句と前置詞句を中心に

塩原佳世乃 (東京女子大学)

本発表は、日英語における動詞による項の選択の違い (例 *It will take [^ofrom] three to five days] for him to recover*. 彼が回復するのに[3 日から 5 日(*まで)]かかるだろう) を分析し、それが一部それぞれの言語の一般的な音韻特性、特に英語の前置詞は通常強勢を欠く一方、日本語の後置詞はそれを含む後置詞句のアクセントパターンに影響を与えることにより導かれることを示す。Pinker and Jackendoff

(2005[1])などにおいて、語彙の統語的特性を示す項構造は語順に言及して捉えられるものでそれゆえ統語部門から語順を排除することはできないと見なされてきたが、項構造に対して音韻論的なアプローチが可能であるとすると、それは統語部門を一部語順から解放し強い極小主義のテーゼ(Chomsky 2000[2] et seq.)の方向性を支持することとなる。

[1] “The Faculty of Language: What’s Special about it?” *Cognition* 95, 201-236. [2] “Minimalist Inquiries” in Lasnik et al. (eds.) *Step by Step*, MIT Press.

Zoom 第5室 (11月5日午後)

司会 小田登志子 (東京経済大学)

Commitment Space Semantics and Japanese Sentence Final Particles

Daiki Matsumoto (Kyoto University)

We seek to provide a formal semantic account for the use of sentence final particles (SFPs) in Japanese by focusing our attention on how they are used in assertion. The SFPs we examine include *-yo*, *-ne*, and *-sa*. Based on [1], it will be first shown that (i) *-yo* pertains to the speaker’s being committed to the addressee to act upon the assertion, and (ii) *-ne* is used to express that the addressee is committed to the speaker to act upon the speech act. Furthermore, it will be argued that *-sa* expresses the speaker’s belief, which corresponds to the speaker being committed to themselves to act upon their own assertion [2]. Finally, we will propose a concrete syntactic structure of these SFPs, on the basis of the formal

semantic analysis proposed in this talk.

[1] Krifka, M. (2016) “Bias in Commitment Space Semantics: Declarative questions, negated questions, and question tags,” *Proc. of SALT 26*.

[2] Geurt, B. (2019) “Communication as commitment sharing: Speech acts, implicatures, common ground,” *Theor. Ling.* 45.

意味的主要部編入とタイプ同定による強制現象の分析

高橋寛 (昭和大学)

日本語の[NP1のNP2]形の名詞句の中には「TシャツのLサイズ」「牛丼の大盛」「ベンツの中古」ように本来属性を表す表現がNP2に生起するものがある (cf. 「LサイズのTシャツ」)。高橋(2022[1])ではこのような名詞句を同格属格名詞句(AGNP)と呼び、その解釈には意味的主要部編入とタイプ同定という2つの意味的操作に関わることを提案したが、本発表ではAGNPにおけるNP2の意味タイプの変換をいわゆる強制現象 (coercion) (Pustejovsky (1995[2])など)の一事例とみなし、これらの意味的操作に一般的な言語学的メカニズムとしての地位を与える。そしてそれらが日本語の評価的同格構文や英語の Qualitative Binominal Noun Phrase など他のさまざまな構文にみられる強制現象の説明に幅広く応用できることを示す。

[1]高橋寛. 2022. 「日本語の同格属格名詞句の解釈メカニズム」『都留文科大学研究紀要第95集』 [2]Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. MIT Press.

Modalities of Post-Auxiliary Ellipsis: A False Dichotomy?

Yosuke Sato (Tsuda University)

Hajime Ono (Tsuda University)

Haruka Ikebuchi (Tsuda University)

Fuwa Makino (Tsuda University)

Nonoko Morita (Tsuda University)

Misato Nagumo (Tsuda University)

The availability of modally licensed Post-Auxiliary Ellipsis (PAE) is generally restricted to the root interpretation of a modal selecting the ellipsis target, and, within the epistemic class, possibility modals, not necessity modals, license it. We develop an analysis of these facts informed by Cinque's (1999) universal hierarchy whereby root and epistemic possibility modals license vP-ellipsis, and epistemic necessity modals TP-ellipsis – a distinction independently supported by the 'same subject requirement' and voice mismatch data. Our analysis challenges the common wisdom that English has TP-ellipsis only under sluicing. It also launches a new investigation into commonalities between English PAE and Romance modal complement ellipsis. These results indicate that the observed interaction between modality and ellipsis cannot be fully captured by simple dichotomies like root vs. epistemic and necessity vs. possibility, but must be approached through the fine-grained cartographic structure underlying these distinctions.

英語の名詞句からの外置構文における Pair-Merger 分析

田中公介 (産業医科大学)

本発表では, Epstein, Kitahara and Seely (EKS)(2016[1])における Pair-Merger 操作を基にして, (1)の名詞句からの外置(Extraposition from DP: ExDP)構文の派生を考察する。

- (1) a. A review _ came out yesterday [of this article].
b. John read a paper _ over the summer [of Chomsky's].

具体的には, 外置要素が然るべき統語対象物との間で Pair-Merger の適用を受けた結果, 派生上不可視になると仮定する。これは, Pair-Merger 分析が, 主要部要素間の外的併合のみならず(cf. EKS (2016)), 句要素間の内的併合に適用される可能性を追究するものであり, このような XP-YP の併合構造で両者に更なる内的併合や一致が適用されない場合のラベル形成手段として Pair-Merger が選択されると考える。また, 外置要素の併合位置については, Tanaka (2011[2])の C-I インターフェイス条件に基づき, その修飾対象となる名詞句と同一の転送領域内であると仮定する。この分析により, 外置要素の併合位置に適切なラベルが付与される(Chomsky (2013[3])のみならず, その多様な文法特性が捉えられる。

[1] "Phase Cancellation by External Pair-Merger of Heads," *Linguistic Review* 33. [2] "On Extraposition from NP Constructions," *EL* 28-2. [3] "Problems of Projection," *Lingua* 130.

<公開特別シンポジウム>

シンポジウム第1室（11月5日午後）

*公開シンポジウム

英語の常識・世界の言語の非常識： 英語学の知見が個別言語の研究に与える 正の影響と負の影響

司会 大谷直輝（東京外国語大学）

現在、英語は、言語学における実質的な共通言語となるだけでなく、英語の研究から発展した概念や理論が、個別言語を考察する際の前提や記述装置として広く共有されている。本シンポジウムでは、コイサン諸語、ドイツ語、ロシア語、マレー語、タガログ語、ラマホロット語の具体的な現象の分析を通して、英語学における概念や理論が各言語の分析にどのような影響を与えているかを紹介する。特に、講師が実際に各言語を分析する際に感じている英語学が与える負の影響を検討しながら、(i) 英語の研究から発展した概念や理論を言語の比較の指標として用いる有効性、(ii) 英語の現象だけを見て「言語」とはこうであると一般化する危険性、(iii) 英語学の知見を各言語の分析に応用する際の注意点等についても検討していく。最終的には、異なる言語を専門とする研究者間での有益な意見交換を行うと同時に、複数の言語を見ながら英語の現象や言語一般を論じる重要性についても再確認する。

コイサン諸語のクリック子音の音韻分析： *SPE* と単一音素分析の系譜

講師 中川裕（東京外国語大学）

コイサン諸語は多数のクリック子音を区別する複雑な子音体系をもち、その複雑さゆえに、世界の言語において破格的な大きさの子音音素目録をもつことが知られている。この類型論的に稀な特徴は、世界の平均的な子音目録サイズをもつ英語の音韻論的研究とは関係がなさそうに見える。ところが、Chomsky and Halle (1968) *The Sound Pattern of English (SPE)*にはクリック子音の音韻表示についての議論が含まれ、これが未だに影響力をもち続けているように見える。それは、コイサン音韻論の文脈で現在も未解決の問題、すなわち、クリックが関与する子音複合体を、すべて単一の音素と分析するか、少なくとも一部を子音音素の連続と分析するかという論争に関わる。

発表では、この単一音素分析と子音連続分析の論争を踏まえて、コイサン音韻論の規模拡大と精緻化の歴史と、音韻類型論におけるコイサン子音体系の扱いを検討しながら、*SPE*が単一音素分析アプローチを採用したことの学問史的な意味を議論する。

完了時制 vs. 過去時制 — ドイツ語研究から省みる

講師 藤縄康弘（東京外国語大学）

完了時制（助動詞＋過去分詞による迂言形）と過去時制（動詞単独の屈折）との対立はドイツ語にも存在する。英語の完了時制がもつばら「いま」および「いま」に隣接する以前（*Extended Now*）を指すのに対し、「いま」を含まない過去をも指示するドイツ語の完了時制は日常的に過去時制を代替する表現である。

にもかかわらずドイツ語研究では、「いま」に関わるものだけでなく、純粋な過去指示も含めた完了時制の機能全体に英語の「現在完了」的図式を適用しようとする試みが目立つ。

英語学の「負の影響」とも言えるこうした姿勢に対し、本発表はドイツ語の完了時制が「現在完了」と「過去」という別個の機能を体现する両義的範疇であることを主張する。この両義性の重要な基盤としてドイツ語が英語以外の多くの言語と共有しているアスペクトや主語にまつわる原理を紹介し、英語における完了時制・過去時制の関係をあらためて省みる材料とする。

ロシア語において DP という機能範疇を設定する必要性

講師 後藤雄介（東京ロシア語学院）

講師 宮内拓也（東京大学）

講師 匹田剛（東京外国語大学）

生成文法の枠組みにおいて、*the book* のような名詞句の最大投射は伝統的に名詞 N を主要部とする NP だと考えられていたが、DP 仮説の提案以来、限定詞 D を主要部とする DP が名詞句の最大投射だとする分析が一般的になった。一方、顕在的な冠詞を持たない言語においても名詞句の最大投射を DP とすべきなのかに関しては、現在も活発な議論が続いている。本報告では、英語を基に提案された DP が、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても設定すべきかどうかを取り上げ、英語の分析がロシア語という個別言語の分析に与えている影響を検討する。本報告では対立する2つの主張として、束縛現象及び指示代名詞・所有形容詞と形容詞の形態統語的類似性からロシア語には DP を設定する必要性がないとの主張と、数詞句(内部)の格表示及び数詞句と

動詞の一致の可変性の観点からはロシア語にも DP を設定する必要性があるとの主張を紹介する。

何を受動文と呼ぶか・呼ばないか？

講師 野元裕樹（東京外国語大学）

学校英文法や形式主義統語論では、英語の受動文は以下の3つの性質により特徴付けられる。①対応する能動文で目的語である被動者が主語となる。②対応する能動文で主語である動作主が明示的に表現されなかったり、前置詞句として表現されるなど、背景化される。③動詞が有標の形式を取る。マレー語（マレーシア、シンガポール、ブルネイ）で伝統的に受動文とされる構文群には、上記3つの性質をすべて持つものもあれば、そうでないものもある。英語によるマレー語研究では後者を前者になるように分析したり（無形前置詞の仮定）、後者を受動文ではないとする見方（受動態とは別個の「目的語態」の認定）が浸透しつつある。そのような分析や見方の背後には、英語の受動文から逸脱する構文を受動文とは認めたくない気持ちがある可能性がある。本発表では、最低限①を満たせば受動文であると認めるのが、個別言語研究・通言語的比較の双方の上で望ましいと論じる。

英語と世界の言語の与格交替

講師 長屋尚典（東京大学）

英語の与格交替は、世界の言語の文法現象のなかでも最も研究されてきた現象の一つである。本発表では、そのような英語の与格交替を世界の言語の類似する文法現象と比較して位置づけるとともに、その研究成果を発表者自身の研究においてどのように活かすことができたかを紹介する。具体的には、英語の

与格交替を適用態や動詞連続構文など類似する他の文法現象と比較し、英語学で明らかにされてきた与格交替の特徴とこの交替の要因がこれらの現象にも関与することを示す。さらに、私自身の研究に基づいて、孤立の特徴を持つラマホロット語(インドネシア)の与格交替、そして、「フィリピン・タイプ」と呼ばれる特殊なアラインメント体系を持つタガログ語の場所ヴォイスの分析を紹介する。英語学が明らかにしてきた与格交替の知見は世界の言語の類似する文法現象の分析に有効である。

< 特別講演 >

Zoom 第1室 (11月6日午前)

司会 大関洋平 (東京大学)

Reducing Lexical Categories to Two Syntactic Heads: Implications for Causative Alternations

Lecturer Alec Marantz (New York University)
Wood & Marantz (2017) reduced a set of argument introducing heads, including voice, APPL, POSS, and adpositions, to a single functional head, *i**, leaving, *a*(djective), and *v* as independent lexical category heads. Following Shushurin (2021) among others, I propose reducing *n* and *a* (in some languages) to a “gender” head. Verbs will be analyzed as a Merger of two *i** heads, with *i** reanalyzed as a “transitivity” head to acknowledge its function as an argument introducer. I use the extended *i** theory to address a puzzle from causative constructions that appears in Japanese among other languages: “lexical” causatives can be constructed from unergative as well as unaccusative verbs (unlike in English), and the resulting transitive verbs behave uniformly, regardless of their intransitive bases. Languages like Malayalam will help support an analysis in which the causatives of unergatives are like canonical transitive verbs with (just) two transitivity heads, although the higher head is featurally marked as +DP. “Syntactic” causatives involve an extra transitivity head, which may or may not trigger the interpretation of an additional, causing, event. For Japanese, “lexical” causatives with -s- spell out a marked transitive head (voice) while syntactic causative in -sase spell out two

such heads, one in addition to the canonical two transitivity heads of a basic verb. The presentation will crucially address the role of the verbal root – that is, the role of the “lexicon” – in constraining or determining the syntax and semantics of clauses built with sets of the transitivity heads.

Zoom 第2室 (11月6日午前)

司会 山村崇斗 (筑波大学)

言語はなぜ身体的でかつ恣意的なのか—「類像性の輪」仮説

講師 今井むつみ (慶應義塾大学)

ことばは世界を模したアイコンではなく、抽象的な意味をもつ記号である。記号と意味の間の関係は恣意的であるとされてきた。実際、現代の言語における語彙は極度に複雑に体系化された抽象的な記号の集積であり、多くのことばに対して音像徴を感じることはない。しかし近年は、言語の形式、特に音と意味の間に有意味なつながりがあること、言語習得の初期において音像徴が重要な役割を果たすことを示す実証的な証拠が多数報告されている。ここに疑問が生まれる。言語はジェスチャーあるいは口から発する音により世界を模倣したところから発生したという説は有力であるが、その進化の過程で言語はどのように身体から離れていったのだろうか？また、そのために言語の発生にはどのような認知能力が基盤となったのだろうか？現代の成人話者はなぜ言語固有の体系に埋め込まれ、それゆえに非常に抽象的な概念を指示することばでさえ、母語のことばを自然に感じ、抽象性をあまり感じないのだろうか？本講演では子ども

もの母語の習得の過程からこれらの問いを考察し、その答えとして「類似性の輪」仮説を提唱する。

Zoom 第3室 (11月6日午前)

司会 坂本祐太 (明治大学)

θ 規準再考-コピー形成操作とラベル付け理論をふまえて

講師 齋藤 衛 (ノートルダム清心女子大学)

θ 役割と項が 1-1 の関係にあるとする θ 規準は、LGB 理論において最も基本的な原理の一つとして提案された。一方で、その後、この原理に対する疑問が様々な形で提示されてきた。本論では、θ 規準をめぐる議論を概観し、その文法理論からの除去を提案する。

DS の除去に伴って、θ 位置への移動による分析が多く提案され、一例として、Hornstein による制御の移動分析がある。Chomsky [2]は、その洞察を受け継ぎ、θ 位置への移動を仮定せずに、項が二つ以上の θ 役割を担うことを可能にする分析を提案しており、これをもって θ 規準の一つの主張が否定されたと言える。θ 役割は二つ以上の項に与えられないとするもう一方の主張については、Kuroda が、日本語から反例を提示している。本論では、Chomsky [1]のラベル付け理論をふまえれば、英語において二重項が許容されない事実が、θ 規準を仮定せずに説明されることを示して、θ 規準の完全な除去を提案する。

Chomsky, N. 2013 “Problems of projection” [1],
Chomsky, N. 2021 『言語研究』論文 [2],
Hornstein, N. 1999 “Movement and control,”
Kuroda, S.-Y. 1988 “Whether we agree or not.”

<シンポジウム>

シンポジウム第2室 (11月6日午後)

Tense: Comparison between Japanese and English

Chair Sumiyo Nishiguchi (Otaru University of
Commerce)

Tense is one of the most controversial topics in linguistics. This symposium highlights tenses, tense morphemes and adverbs in English and Japanese from different perspectives. Ogihara and Steinert-Threlkeld will discuss the behavior of tense morphemes in temporal adverbial clauses (such as *before/mae* and *after/ato* clauses) in English and Japanese. Komoto discusses the meanings of the evidential marker *-rashii* and the epistemic marker *-kamosirenai* with the morpheme *-ta*. I consider the so-called past tense of surprise or discovery, which is a modal past, based on the anaphoricity of the pronoun. Nishiyama will analyze the deictic uses of the English and Japanese present-time adverbs, *now* and *ima*, whose referents appear to be located within different ranges of time. Hohaus will share some of the findings from her lab on the processing of tense in English, and end with some thoughts on Japanese.

Extensional vs. Intensional Approaches to the Semantics of Non-veridical *Before*

Lecturers Toshiyuki Ogihara (University of
Washington) and
Shane Steinert-Threlkeld (University of
Washington)

We shall discuss the behavior of tense

morphemes in *before/mae* and *after/ato* clauses in English and Japanese. We will compare Anscombe's [1] purely extensional analysis and Beaver and Condoravdi's [2] intensional analysis of *before/after*. [1] is deceptively simple and requires no intensional semantics. [2] proposed an alternative analysis in which *after* and *before* are lexical converses and the clausal complement of *after* and *before* denotes the earliest time at which the sentence is true at any of the "accessible" worlds. [1] is more parsimonious than the proposal in [2], and it makes more accurate predictions about the data if it is supplemented by a small number of pragmatic principles. By replacing the universal quantifier in Anscombe's original proposal with a negated existential, we can also explain some additional data involving expletive negation [3] in many languages.

[1] Anscombe, G. E. M. (1964) *Before and after*. *The Philosophical Review*. [2] Beaver, D. and C. Condoravdi. 2003. A uniform analysis of *before* and *after*. *SALT* 13. [3] Jin Y and J.-P. Koenig (2019) Expletive Negation in English, French, and Mandarin: A Semantic and Language Production Model. *Empirical Issues in Syntax and Semantics* 12.

Some Evidential and Epistemic Markers, Past Tense Morpheme, and Perspective Shift

Lecturer Naoko Komoto (National Institute of
Technology, Ishikawa College)

In this talk, I will discuss the meanings of the evidential marker *rashii* 'it seems' and the epistemic marker *kamosirenai* 'may' with the past tense morpheme *-ta*. They are sparingly used in spoken language and sometimes in written texts, as

studied in Nihongo Kijutsu Bunpoo Kenkyuukai (2003 [1]). I am examining their semantics in terms of perspective. Some of these expressions can convey the same meanings without the past tense morpheme *-ta*, while others do not. Investigating both types of examples, I will show that they can be described in terms of perspective shift along the lines of Abrusán (2021 [2]).

[1] Nihongo Kijutsu Bunpoo Kenkyuukai (2003) *Gendai Nihongo Bunpoo 4: Dai 8-bu Modaritii* (Modern Japanese Grammar 4: Part 8 Modality), Kurocio. [2] Abrusán, M. (2021) “The Spectrum of Perspective Shift: Protagonist Projection Versus Free Indirect Discourse,” *L&P* 44.

Surprise Past and Modal Subordination

Lecturer Sumiyo Nishiguchi (Otaru University of Commerce)

This paper argues that the past tense of surprise or discovery as in *While I thought there was no cat in this island, it was here!* when finding what has not been expected or missing (Teramura 1984, others) is a modal past in view of the anaphoricity of the pronoun. While the pronoun in the sentences in past tense can refer back to the indefinites in the antecedent of the conditional or in the previous sentence, those in the present tense do not allow coreference. The antecedent contains an attitude verb or a necessity modal. In order to allow anaphoric reference of pronouns, the subordination relation is required between two sentences, and modal element should be present in the consequent.

Granularity of *Now* in English and Japanese

Lecturer Atsuko Nishiyama (Wakayama University)

This talk compares the uses of the English and Japanese present-time adverbs *now* and *ima* ('now'). They both refer to the time of utterance in conversation and a time in narrative discourse, but they seem different in the range of time they refer to. For example, *ima* can occur in the past out of the blue, while *now* cannot. The difference will be analyzed, extending the stativity requirement of *now* [1] and reference time updates in narrative discourse [2], combined with the contrast in the tense and aspect system between English and Japanese.

[1] Altshuler, D. (2016) *Events, States and Times*. Berlin: De Gruyter. [2] Partee, B. (1984) Nominal and temporal anaphora. *Linguistics and Philosophy* 7.

Embedded Tenses in English: The View from Processing

Lecturer Vera Hohaus (The University of Manchester)

This talk revisits the temporal interpretation of complement and relative clauses in English, and “...the puzzling fact that most, but not all, occurrences of past tense convey a meaning of anteriority” [1]. This fact is not only a puzzle for semantic theory and our understanding of the mapping between form and meaning, but also for sentence processing. We will first review some of the key approaches to embedded tenses and discuss the processing predictions they translate to. We will then present a battery of comprehension experiments from joint work with Giuliano

Armenante (Universität Potsdam) and Britta Stolterfoht (Eberhard Karls Universität Tübingen) that were designed to test these predictions.

[1] I. Heim (1994). "Comments on Abusch's Theory of Tense", in H. Kamp (ed.), *Ellipsis, Tense and Questions*. Amsterdam: Universiteit van Amsterdam, 143-170, here 143.

シンポジウム第3室 (11月6日午後)

英語史における主語と節構造の統語変化

司会 田中智之 (名古屋大学)

英語史において主語と節構造に関する様々な統語変化が起こっており、文献学と理論言語学の分野において盛んに研究がなされてきた。初期英語の定形節では、動詞第二位現象や多重主語構文など、現代英語には見られない言語事実が観察されるが、生成文法理論の枠組みでは、節を構成する機能範疇の階層構造において、前置要素、主語、動詞がどのような統語位置を占めているのかという観点から議論がなされてきた。

非定形節の構造や主語の具現化の仕方も顕著に変化しており、生成文法理論の枠組みでは、機能範疇の出現によって節構造が拡張したとするいくつかの研究がある。また、主に文献学の分野で注目を集めている Great Complement Shift と呼ばれる統語変化、すなわち動詞の補文構造が *that* 節から不定詞節、不定詞節から動名詞節へと変化するという興味深い傾向が見られる。

本シンポジウムではこのような研究動向を踏まえ、英語史における主語と節構造の統語変化に関する諸問題に取り組む。

主語・(助) 動詞倒置の史的変化

講師 小池晃次 (富山大学)

本発表では、現行の生成文法の枠組みを用いて英語における主語・(助) 動詞倒置の史的变化を考察する。初期英語における動詞第二位現象は第一構成素が何かによって倒置のパターンが違うことが知られている(Fischer et al. (2000[1])). 具体的には、話題要素で始まる場合、話題要素+定形 V+主語 NP または話題要素+主語代名詞+定形 V の語順で、主語 NP に限って動詞との倒置が生じた点で現代英語と異なる。他方で、疑問詞や否定辞で始まる場合、疑問詞/否定辞+定形 V+主語 NP/代名詞で、主語の種類に関わらず倒置が起きた。ただし、主語と倒置するのは *do* のような助動詞ではなく豊かに屈折した一般動詞であった点が現代英語と異なる。ラベル付け(Chomsky (2013[2]))を含めた最先端の道具立てを用いながら、上記のそれぞれのパターンを統語的に分析することを試みる。こうして、主語・(助) 動詞倒置という事例を通じて、本シンポジウムのテーマである主語と節構造の統語変化を具体的に議論する。

[1] *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press. [2] "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.

節の結合と縮約—英語関係節の発達から

講師 縄田裕幸 (島根大学)

古英語で関係代名詞として用いられた *se*, *sēo*, *þæt* などの指示詞が補文標識 *that* に変化した後、中英語で *which* などの *wh* 語が非制限関係節に現れ、次第に制限関係節でも用いられるようになった。また後期中英語期に目的格ゼロ関係節が出現して初期近代英語で広がった (宇賀治 (2000[1])).

本発表では、Rizzi (1997[2])以降の細分化された節構造に基づき、英語の *wh* 関係節とゼロ関係節の発達を節の結合と縮約という観点から分析する。具体的には、上記の変化は主節と並列的な構造をなす非制限 *wh* 関係節が内心構造をなす制限関係節へと発達し、さらに節構造の一部が縮約されてゼロ関係節が出現したものと捉えられる。また、主語位置の推移など英語の節構造全般に生じた変化と関係節の発達との関連について考察するとともに、最近の句構造理論に与える含意についても言及したい。

[1] 『英語史』開拓社. [2] “The Fine Structure of the Left Periphery” *Elements of Grammar*, ed. by L. Haegeman, Kluwer, 281-337.

非定形節における動詞移動の出現と消失

講師 田中智之 (名古屋大学)

初期英語の不定詞節では動詞が否定辞に先行する語順が観察される。また、初期英語の分詞構文では動詞が否定辞に先行する語順、および動詞が語彙的主語に先行する語順が観察される。これは非定形節において TP 領域または CP 領域への動詞移動が可能であったことを示唆するが、いずれも英語史の特定の時期にのみ見られる語順である。

本発表では歴史コーパスを用いて調査を行い、初期英語の不定詞節と分詞構文における動詞移動の出現と消失の全体像を明らかにする。そして、Haerberli and Ihsane (2016 [1])の一致に基づく動詞移動の分析を一部修正し、非定形節における動詞移動の歴史的発達を節構造の変化に関連付けて説明する。その際、定形節における動詞第二位現象の衰退と消失が果たした役割についても考察する。

[1] “Revisiting the Loss of Verb Movement in the

History of English,” *TRL* 34.

英語の補文構造—その史的变化の道筋

講師 家入葉子 (京都大学)

現代英語の動詞の補文構造は多様で、その選択にかかわる要因を扱う研究は多い。同様に興味深いのは、多くの動詞がその歴史において、補文構造の変化を経験してきたことである。たとえば、*that* 節を従えていた *forbid* は、近代英語期以降には *to* 不定詞を取るのが普通になり、現在は、「*forbid*+ 目的語+(*from*)-*ing*」構文を急速に増加させている (Iyeiri (2017[1]) など)。

動名詞構文が補文の史的变化の過程で増加傾向を示すことは、Rohdenburg (2006[2])の *Great Complement Shift* という用語とともに先行研究でも広く共有された情報である。本発表では、動名詞の使用が拡張する過程で、特に「禁止」や「妨げ」を表す動詞において現れる *from-*ing** 構文に焦点を当てながら、主に近代英語期以降に起こった補文構造の変化を再考する。近年の変化が特徴的な動詞 *prevent* に着目しながら議論を進める予定である。

[1] “Recent Changes in the Use of the Verb *forbid*”

[2] “The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System”

シンポジウム第4室 (11月6日午後)

「見えない形態素」をめぐる音韻現象：その理論分析モデルと英語音韻論・形態論への意味合い

司会 田中伸一 (東京大学)

英語にはゼロ派生 (品詞転換) のように、派生接辞を伴わず同じ音列のまま意味を変えて

派生する「見えない形態素」が存在する。接辞を伴わず意味を変えるという点では、強勢転換 (pérmít/permít) や文音調 (Caution./Caution?/Caution!) も「見えない形態素」に起因する。本シンポジウムでは、このように固定した分節音としての実体 (接辞のような形態) を持たずになんらか音実現する「見えない形態素」に着目し、それにかかわる複合語・非単一形態語レベルの音韻現象を新規発掘・紹介することで、その理論分析のモデルと英語音韻論・形態論に与える意味合いを考察する。理論的には「見えない形態素」の音実現は Realize-Morpheme (形による意味の具現化を要求する制約; RM) が引き金となると考えられるが、どのような「見えない形態素」のタイプがどのように音実現するか、そこに RM がどのように関与するか・しないのか、などの問題を検討する。

日本語の重複複合語における形態音韻バリエーションについて

講師 西村康平 (青山学院大学)

本発表では、日本語の重複複合語におけるバリエーションを分析し、それが基底構造における様々な要因に起因して生じることを主張する。日本語の重複複合語では音韻構造のコピーに加えて、連濁の適用や主要部構造、語彙クラスの違いなどの要素が関係しており、多様な形態音韻的バリエーションを示すことが知られている (Nishimura 2013 [1])。こうしたバリエーションの原因としては、BASE 形態素、RED 形態素、連濁形態素などの形態素群およびそれらの基底表示における線形順序が重要であり、日本語ではこれらの可能な組み合わせの複数を運用することにより、各種の重複表現を使い分けていることを示す。加え

て、英語を含む他の言語の重複表現における形態音韻バリエーションとも比較し、通言語的な観点からも検討する。また、最適性理論の枠組みにおいて、こうした「見えない」形態素がどのように音韻実現するのかの分析を通して Correspondence Theory, Word Faithfulness Theory, Realize Morpheme Theory, Anti-Faithfulness Theory などの下位理論での分析の妥当性も検討する。

[1] *Morphophonology of Japanese Compounding*, Ph. D. dissertation, University of Tokyo.

Realize-Morpheme は Item and Arrangement を救えるのか – 日本語の連濁と母音交替から見た英語不規則動詞の過去形

講師 Maelys Salinger (目白大学)

Hockett (1954 [1]) は一部の異形態が Item and Arrangement (IA) で上手く説明できないと指摘している一方で、形態素を実現させる Realize-Morpheme (RM) という制約を利用することで、それらの問題を解決できることがある。例として日本語の連濁が有声しか持たない形態素の実現であるとするれば、日本語のレキシコンの大半が有声化した異形態を持っていると仮定しなくて済み、ライマンの法則や語彙層の影響もより緻密に説明できる (Ito & Mester 2003 [2])。さらに、英語の不規則動詞の過去形は、IA ではうまく説明できないと指摘されているが (Anderson 1992 [3])、RM で分析できるのかはあまり検証されていない。そこで本発表では、連濁を上手く捉えられる一方で、なぜ RM が日本語の複合語における母音交替を十分説明できないのかについて考察する。その結果、上記の現象と英語の過去形を比較し、英語の過去形と日本語の母音交替の類似点から、二つとも RM を適用するのに

相応しくないという結論に至った。

- [1] “Two models of grammatical description,” *Word* 10. [2] *Japanese Morphophonemics*, MIT. [3] *A-Morphous Morphology*, Cambridge.

複合語アクセントにおける見えない形態素と理論的分析

講師 黄竹佑 (名古屋学院大学)

日本語の複合語アクセントは規則性を持っており、その中の要素のアクセントから複合語のアクセントを予測できる。たとえば、形態構造における主要部は従属する要素よりアクセントが保持される傾向が見られる。なかでも左側主要部複合語と並列複合語のアクセントは他の語と異なり、左側要素のアクセントが保持される。上記の現象を説明するために、形態部門・音韻部門の写像と形態構造における主要部が音韻部門でアクセント保持の優先対象とする処理を同じ土台で評価できる最適性理論を用いる必要があると考えられる。また、並列複合語で左側要素のアクセントが保持されることについては、英語の複合語で提案された並列素性 (Bisetto & Scalise 2005 [1]) が基底表示にあると仮定すれば、並列複合語のアクセントも Realize-Morpheme (RM) で予測できる。同時に英語の並列複合語の強勢と形態構造の関係性についても考察し、形態・音韻境界に関する忠実性制約が存在していると主張する。

- [1] “The classification of compounds”. *Lingua e Linguaggio* 4.2: 319–0.

広東語の変音現象の無秩序な歴史変化：3つの接辞付加法による統一的説明

講師 田中伸一 (東京大学)

広東語の複合語形成は後部要素の音調変化

(pinjam; 変音)を伴うが (Yue-Hashimoto 1972 [1])、理論的にこれは浮遊音調形態の右端付加によるものである (Yip 1980 [2])。「見えない」形態素の接尾辞化である。ただ、ここ 50 年の歴史変化を調べると (Tanaka et al. 2022 [3])、変音適用が [随意的→義務的]、[義務的→随意的]、[随意的→不適用]になるという 3 パターンが観察され、無秩序・混沌の様相を呈している。本発表では、この不可解な歴史変化を、「見えない」変音形態の 3 つの付加法 (接尾辞化・接頭辞化・接周辞化)のもとで分析することで、最適性理論の立場から統一的説明が得られることを立証する。英語形容詞の動詞化接辞 *en* の付加法が、*soften*, *enrich*, *enlighten* のように 3 つあるのと同様である。また、提案する分析における「見えない」形態素の具現が、必ずしも Realize-Morpheme に依存しないことも主張する。

- [1] *Studies in Yue dialects 1: Phonology of Cantonese*, Cambridge [2] *The tonal phonology of Chinese*, Ph.D. dissertation, MIT [3] “The variation, change, and opacity of pinjam in Cantonese: Its unity in variety and implications for tonal representations”